

幫間

谷崎潤一郎

青空文庫

明治三十七年の春から、三十八年の秋にかけて、世界中を騒がせた日露戦争が漸くポウツマス条約に終りを告げ、国力発展の名の下に、いろいろの企業が続々と勃興して、新華族も出来れば成り金も出来るし、世間一帯が何となくお祭りのように景氣附いて居た四十年の四月の半ば頃の事でした。

丁度向島の土手は、桜が満開で、青々と晴れ渡った麗らかな日曜日の午前中から、浅草行きの電車も蒸汽船も一杯の人を乗せ、群衆が蟻のようにぞろぞろ渡って行く吾妻橋の向うは、八百松からやおまつ言問の艇庫の辺へ暖かそうな霞がかゝり、対岸の小松宮御別邸ことゝいを始め、橋場、今戸、花川戸の街々まで、もや／＼とした藍色の

光りの中に眠つて、其の後には公園の十二階が、水蒸氣の多い、咽せ返るような紺青の空に、朦朧と立つて居ます。

千住の方から深い霞の底をくゞつて来る隅田川は、小松島の角で一とうねりうねつてまんくたる大河の形を備え、両岸の春に酔つたような慵^{ものう}げなぬるま水を、きらく日に光らせながら、吾妻橋の下へ出て行きます。川の面は、如何にもふつくらとした鷹揚^{おうよう}な波が、のたりくとだるそうに打ち、蒲団のような手触りが

がするかと思われる柔かい水の上に、幾艘のボートや花見船が浮かんで、時々山谷堀の口を離れる渡し船は、上り下りの船列を横ぎりつゝ、舷に溢れる程の人数を、土手の上へ運んで居ます。

其の日の朝の十時頃の事です。神田川の口元を出て、亀清^{かめせいろう}楼の

石垣の蔭から、大川の真ん中へ漕ぎ出した一艘の花見船がありました。紅白だんだらの幔幕に美々しく飾った大伝馬^{おおてんま}へ、代地^{だいち}の幫間^{ほうかん}藝者を乗せて、船の中央には其の当時兜町で成り金の名を響かせた榊原と云う旦那が、五六人の末社^{まつしゃ}を従え、船中の男女を見廻しながら、ぐびりぐびりと大杯を傾けて、其の太った赭^{あか}ら顔には、すでに三分の酔いが循^{まわ}つて居ます。中流に浮かんだ船が、藤堂伯の邸の塀と並んで進む頃、幔幕の中から絃歌の声が湧然と起こり、陽気な響きは、大川の水を揺がせて、百本杭と代地の河岸を襲つて来ます。両国橋の上や、本所浅草の河岸通りの人々は、孰れも首を伸ばして、此の大陽氣に見惚^{みと}れぬ者はありません。船中の様子は手に取るように陸から窺われ、時々なまめかしい女の

言葉さえ、川面を吹き渡るそよ風に伝わって洩れて来ます。

船が横網河岸へかゝつたと思う時分に、忽ち舳ともへ異いぎ形ようなろくろ

首の変装人物が現れ、三味線に連れて滑稽極まる道化どうけおど踊りを始

めました。女が目鼻を描いた大きい風船玉へ、恐ろしく細長い紙

袋の頸をつけて、其れを頭からすっぽり被つたものと思われま

本人の顔は皆かいもく目袋の中へ隠れて、身にはけけしい友禪の振

袖を着、足に白足袋を穿いては居るものゝ、折りゝかぎす踊り

の手振りに、緋の袖口から男らしい頑丈な手頸が露われて、節く

れ立つた褐色の五本の指が殊に目立ちます。風船玉の女の首は、

風のまにまにふわゝと飛んで、岸近い家の軒を窺かすつたり、擦れ

違いさまに向うの船の船頭の頭を掠かすめたり、その度毎に陸上では

目を^{そばだ}忖て、見物人は手を打って笑いとよめきます。

あれ／＼と云ううちに、船は厩橋の方へ進んで来ました。橋の上には真つ黒に人がたかり、黄色い顔がずらりと列んで、眼下に迫つて来る船中の模様を眺めて居ります。だん／＼近づくに随い、ろくろ首の目鼻はあり／＼と空中に描き出され、泣いて居るような、笑つて居るような、眠つて居るような、何とも云えぬ^{ひょうい}飄逸な表情に、見物人は又可^{おか}笑しさに誘われます。兎角するうち、舳が橋の蔭へ這入ると、首は水嵩の増した水面から、見物人の顔近くする／＼と欄干に軽く^{こす}擦れて、其のまゝ船に曳かれて折れかゞまり、橋桁の底をなよ／＼と這つて、今度は向う側の青空へ、ふわり、と浮かび上がりました。

駒形堂の前まで来ると、もう吾妻橋の通行人が遙かに此れを認め、さながら凱旋の軍隊を歓迎するように待ち構えて居る様子が、船の中からもよく見えます。

其処でも厩橋と同じような滑稽を演じて人を笑わせ、いよ／＼向島にかゝりました。一丁ふえた三味線の音は益々景氣づき、丁度牛が馬鹿囃しの響きに促されて、花車だしを挽くように、船も陽気な音曲の力に押されて、徐々しずくと水上を進むように思われます。大川狭しと漕ぎ出した幾艘の花見船や、赤や青の小旗を振ってボートの声援をして居る学生達を始め、兩岸の群衆は唯あつけに取られて、此の奇態な道化船の進路を見送ります。ろくろ首の踊りはます／＼宛えんてん転滑脱かつだつとなり、風船玉は川風に煽られつゝ、忽ち

蒸汽船の白煙りを潜り抜け、忽ち高く舞い上って待乳山を眼下に見、見物人に媚ぶるが如き痴態を作つて、河上の人気を一身に集めて居ます。言問の近所で土手に遠ざかつて、更に川上へ上つて行くのですが、それでも中の植半から大倉氏の別荘のあたりを徘徊する土手の人々は、遥かに川筋の空に方り、人魂のようならくろ首の頭を望んで、「何だろう」「何だろう」と云いながら、一様に其の行くえを見守るのです。

傍^{ぼうじゃくぶじん}若無^な人の振舞いに散々土手を騒がせた船は、やがて花月華壇の棧橋に纜^{ともづな}を結んで、どや／＼と一隊が庭の芝生へ押し上がりました。

「よう御苦労、御苦労。」

と、一行の旦那や藝者連に取り巻かれ、拍手喝采のうちに、ろくろ首の男は、すっぽり紙袋を脱いで、燃え立つような紅い半襟の隙から、浅黒い坊主頭の愛嬌たつぷりの顔を始めて現わしました。河岸を換えて又一と遊びと、其処でも再び酒宴が始まり、旦那を始め大勢の男女は芝生の上を入り乱れて、踊り廻り跳ね廻り、眼隠しやら、鬼ごっこやら、きやツきやツと云う騒ぎです。

例の男は振袖姿のまゝ、白足袋に紅緒あかはなおの麻裏をつツかけ、し

どろもどろの千鳥足で、藝者のあとを追いかけてたり、追いかけられたりして居ます。殊に其の男が鬼になった時の騒々しさ賑やかさは一入ひとしおで、もう眼隠しの手拭いを顔へあてられる時分から、

旦那も藝者も腹を抱えて手を叩き、肩をゆす振って躍り上ります。

紅い蹴出しの蔭から毛脛を露わに、

「菊ききちゃんく。さあつかまえた。」

など、何処かに錆さびを含んだ、藝人らしい甲かん声ごえを絞しぼって、女の袂たもとを掠さらめたり、立ち木に頭を打ちつけたり、無茶苦茶に彼方此方へ駆け廻るのですが、挙動の激しく迅速なのにも似ず、何処かにおどけた頓間とんまな処があつて、容易に人を掴まえることが出来ません。

皆みんなは可笑しがって、くすくすと息を殺しながら、忍び足に男の背後へ近づき、

「ほら、此処に居てよ。」

と、急に耳元でなまめかしい声を立て、背中をぽんと打って逃げ

出します。

「そら、どうだ〜。」

と、旦那が耳みみたぶたぶを引つ張つて、こづき廻すと、

「あいた、あいた。」

と、悲鳴を挙げながら、眉を顰ひそめ、わざと仰山な哀れっぽい表情をして、身を悶えます。其の顔つきがまた何とも云えぬ可愛かあい気があつて、誰でも其の男の頭を撲つとか、鼻の頭をつまむとか、一寸からかつて見たい気にならない者はありません。

今度は十五六のお転婆な雛おしやく妓が、後へ廻つて両手で足を掬い上げたので、見事ころ〜と芝生の上を転がりましたが、どツと云う笑い声のうちに、再びのツそり起き上り、

「誰だい、此の年寄をいじめるのは。」

と、眼を塞がれた儘大口を開いて怒鳴り立て、「由良^{ゆら}さん」のよう
に両手を擴げて歩み出します。

此の男は幫間の三平と云つて、もとは兜町の相場師ですが、其の
時分から今の商売がやつて見たくて耐らず、とう／＼四五年前に
柳橋の太鼓持ちの弟子入りをして、一と風變つたコツのある氣象
から、めき／＼^{ひいき}鼻^ひ眞^{いき}を拵え、今では仲間のうちでも相応な好い株
になつて居ます。

「桜井（と云うのは此の男の姓です。）の奴も呑気な者だ。なあ
に相場なんぞをやつて居るより、あの方が性に合つて、いくら好

いか知れやしない。今じゃ大分身入りもあるようだし、結句けつく奴さ
んは仕合わせさ。」

など、昔の彼を知って居るものは、時々こんな取り沙汰をしま
す。日清戦争の時分には、海運橋の近所にかなりの仲買店を構え、
事務員の四五人も使つて、榊原の旦那などとは朋輩でしたが、其
の頃から、

「彼の男と遊ぶと、座敷が賑やかで面白い。」

と、遊び仲間の連中に喜ばれ、酒の席にはなくてはならない人物
でした。唄が上手で、話が上手で、よしや自分がどんなに羽振り
の好い時でも、勿もつたい体たいぶるなど、云う事は毛頭なく、立派な旦那
株である云う身分を忘れ、どうかすると立派な男子であると云

う品位をさえ忘れて、ひたすら友達や藝者達にやんやと褒められたり、可笑しがられたりするものが、愉快でたまらないのです。華やかな電燈の下に、酔いの循まわった夷えびすがお顔をてか／＼させて、「えへ／＼／＼」と相そうごう好を崩しながら、べら／＼と奇警な冗談を止め度なく喋り出す時が彼の生命で、滅めつぼう法嬉しくてたまらぬと云うように愛嬌のある瞳を光らせ、ぐにやりぐにやりとだらしく肩を揺す振る態度の罪のなさ。まさに道楽の真髓に徹したもので、さながら歓楽の権化ごんげかと思われます。藝者などにも、どっちがお客だか判らないほど、御機嫌を伺って、お取り持ちをするので、始めのうちは「でれ助野郎め」と腹の中で薄気味悪がったり、嫌がったりしますが、だん／＼気心が知れて見れば、別にどうし

ようと云う腹があるのではなく、唯人に可笑しがられるのを樂し
 みにするお人好なのですから、「桜井さん」「桜井さん」と親し
 んで来ます。然し一方では重^{ちようほう}宝がられると同時に、いくらお
 金があつても、羽振りがよくつても、誰一人彼に媚を呈したり、
 惚れたりする者はありません。「旦那」とも、「あなた」とも云
 わず、「桜井さん」「桜井さん」と呼び掛けて、自然と伴^つれのお
 客より一段低い人間のように取り扱いながら、其れを失礼だとも
 思わないのです。實際彼は尊敬の念とか、恋慕の情とかを、決し
 て人に起させるような人間ではありませんでした。先天的に人か
 ら一種温かい輕蔑の心を以て、若しくは憐愍の情を以て、親しま
 れ可愛がられる性分なのです。恐らくは乞食と雖、彼にお時儀^{じぎ}を

する気にはならないでしょう。彼も亦どんなに馬鹿にされようと、腹を立てるではなく、却つて其れを嬉しく感じるのです。金さえあれば、必ず友達を誘つて散財に出かけてはお座敷を勤める。宴会とか仲間の者に呼ばれるとかすれば、どんな商用を控えて居ても、我慢がし切れず、すっかりだらしなくなつて、いそ／＼と出かけて行きます。

「や、どうも御苦労様。」

など、お開きの時に、よく友達に^{からか}揶揄われると、彼は開き直つて両手をつき、

「えゝ、どうか手前へも御祝儀をおつかわし下さいまし。」
屹度^{きつと}こう云います。藝者が冗談にお客の声色を遣つて、

「あア、よし／＼、此れを持って行け。」

と紙を丸めて投げてやると、

「へい、これはどうも有難うございます。」

とピヨコピヨコ二三度お時儀をして、紙包を扇の上に載せ、

「へい、此れは有難うございます。どうか皆さんもうすこし投げてやっておくんなさい。もうたつた二銭がところで宜しゅうございます。親子の者が助かります。兎角東京のお客様方は、弱きを扶^{たす}け、強きを挫き………」

と、縁日の手品師の口調でべら／＼弁じ立てます。

こんな呑気な男でも、恋をする事はあると見え、時々黒人^{くろうと}上りの者を女房とも附かず引き擦り込む事がありますが、惚れたとな

つたら、彼のだらし無さは又一入で、女の歡心を買うためには一生懸命お太鼓を叩き、亭主らしい權威などは少しもありません。

何でも欲しいと云うものは買い放題、「お前さん、こうして下さい。あゝして下さい。」と、頗でこき使われて、ハイハイと云う事を聞いて居る意気地のなさ。どうかすると酒癖の悪い女に、馬鹿野郎呼ばわりをされて、頭を擲^{なぐ}られて居ることもあります。女の居る当座は、茶屋の附合いも大概断つて了い、毎晩のように友達や店員を二階座敷に集めて、女房の三味線で飲めや唄えの大騒ぎをやります。一度彼は自分の女を友達に寝取られたことがありますましたが、其れでも別れるのが惜しくつて、いろ／＼と女の機嫌^{きげん}を取り、色男に反物^{たんもの}を買ってやつたり、二人を伴れて芝居

に出かけたり、或る時は其の女と其の男を上座へ据えて、例の如く自分がお太鼓を叩き、すっかり二人の道具に使われて喜んで居ます。しまいには、時々金を与えて役者買いをさせると云う条件の下に、内へ引き込んだ藝者なぞもありました。男同士の意地張りとか、嫉妬の為めの立腹とか云うような気持は此の男には毛程もないのです。

其の代り、また非常に飽きっぽい質で、惚れてくく惚れ抜いて、執拗しつこい程ちやほやするかと思えば、直きに餘熱ほとほりがさめて了い、何人となく女房を取り換えます。元より彼に惚れている女はありませんから、脈のある間に精々搾つて置いて、好い時分に向うから出て行きます。こう云う塩梅あんばいで、店員などにも一向威信がな

く、時々は大穴も明けられるし、商売の方も疎かになって、間もなく店は潰れてしまいました。

其の後、彼は直屋^{じきや}になつたり、客引きになつたりして、人の顔さえ見れば、

「今に御覧なさい。一番盛り返して見せますから。」

など、放言して居ました。一寸おあいそもよし、相応に目先の利く所もあつて、たまには儲け口もありましたが、いつも女にしてやられ、年中びい／＼して居ます。其のうちにと／＼借金で首が廻らなくなり、

「当分私を使って見てくれ。」

と、昔の友達の榊原の店へ転げ込みました。

一介の店員とまで零落しても、身に沁み込んだ藝者遊びの味は、しみ／＼忘れる事が出来ません。時々彼は帳場の机に向いながら、なまめかしい女の声や陽気な三味線の音色を想い出して口の中で端唄はうたを歌い、晝間から浮かれて居ることがあります。しまいには辛抱が仕切れなくなり、何とか彼とか体の好い口を利いては其れから其れへとちび／＼した金を借り倒し、主人の眼を掠めて遊びに行きます。

「彼奴もあれで可愛い奴さ。」

と、始めの二三度は清く金を出してやった連中も、あまり度重なるので遂には腹を立て、

「桜井にも呆れたものだ。あゝずばらじやあ手が附けられない。」

あんな質たちの悪い奴じやなかったんだが、今度無心に来やがったら、うんと怒り附けてやろう。」

こう思つては見るものゝ、さて本人に顔を合わせると、何処となく哀れつぽい処があつて、とても強いことは云えなくなり、

「また此の次に埋め合わせをするから、今日は見逃して貰いたいね。」

ぐらいな所で追い拂おうとするのですが、

「まあ頼むからそう云わないで、借してくれ給え。ナニ直き返すから好いじゃないか。後生お願い！ 全く後生御願いなんだ。」
と、うるさく付き纏つて頼むので、大概の者は根負けをしてしまいます。

主人の榊原も見るに見かね、

「時々己が伴れて行つてやるから、あんまり人に迷惑を掛けないようにしたらどうだ。」

こう云つて、三度に一度は馴染の待合へ供をさせると、其の時ばかりは別人の様にイソイソ立働いて、忠勤を抽^ぬんでます。商売上の心配事で気がくさくする時は、此の男と酒でも飲みながら、罪のない顔を見て居るのが、何より薬なので、主人もしげく供に伴れて行きます。しまいには店員としてよりも其の方の勤めが主になって、晝間は一日店にごろくしながら、

「僕は榊原商店の内藝者さね。」

など、冗談を云つて、彼は得々たるものです。

榊原は堅氣かたぎの家から貰った細君もあれば、十五六の娘を頭に二三
人の子供もありましたが、上かみさん始め、女中達まで皆桜井を可愛
がって、「桜井さん、御馳走がありますから、台所で一杯おやん
なさいな。」と奥へ呼び寄せては、面白い洒落しゃれでも聞こうとしま
す。

「お前さんのように呑氣だったら、貧乏しても苦にはなるまいね。
一生笑って暮らせれば、其れが一番仕合せだとも。」

上さんにこう云われると、彼は得意になって、

「全くです。だから私わッしなんざあ、昔からついぞ腹と云うものを立
てたことはありません。それと云うのが矢張道楽をしたお蔭でこ
ざいますね。……………」

などゝ、其れから一時間ぐらいは、のべつに喋ります。

時には又小声で、錆のある喉を聞かせます。端唄、常磐津、清ときわづ きよも

元と、なんでも一通りは心得て居て自分で自分の美音に酔いなが

ら、口三味線でさも嬉しそうに歌い出す時は、誰もしみ／＼と

聞かされます。いつも流行唄はやりうたを真つ先に覚えて来ては、

「お嬢さん、面白い唄を教えましょうか。」

と、早速奥へ披露ひろうします。歌舞伎座の狂言なども、出し物の変る

度びに二三度立ち見に出かけ、直きに芝翫しかんや八百蔵やおぞうの声色こわいろを覚

えて来ます。どうかすると、便所の中や、往来のまんなかで、眼

をむき出したり、首を振ったり、一生懸命声色の稽古に浮き身を

窶やつして居ることもあります。手持無沙汰の時は、始終口の先で

小唄を歌うとか、物真似をやるとか、何かしら一人で浮かれて居なければ、気が済まないのです。

子供の折から、彼は音曲や落語に非常な趣味を持って居ました。何でも生れは芝の愛宕下辺で、小学時代には神童と云われた程、質問も出来れば、物覚えも良かったのですが、幫間的の氣質は既に其の頃備わつて居たものと見え、級中の首席を占めて居るにも拘わらず、まるで家来のように友達から扱われて喜んで居ました。そうして親父にせびつては毎晩のように寄席よせへ伴れて行つて貰います。彼は落語家に対して、一種の同情、寧ろ憧憬の念をさえ抱いて居ました。先ずぞろりとした風采で高座へ上り、ぴたりとお客様へお時儀をして、さて、

「えゝ毎度伺いますが、兎角此の殿方のお失策しくじりは酒と女でげして、取り分け御婦人の勢力と申したら大したものでげす。我が国は天の窟戸あま いわとの始まりから『女ならではの夜の明けぬ国』などと申します。……」

と喋り出す舌先の旨味うまみ、何となく情愛のある話し振りは、喋って居る当人も、嚙さそ好い氣持だろうと思われます。そうして、一言一句に女子供を可笑しがらせ、時々愛嬌たつぷりの眼つきで、お客の方を一循見廻して居る。其処に何とも云われない人懷ひとなつツこい所があつて、「人間社会の温か味」と云うようなものを、彼はこう云う時に最も強く感じます。

「あ、こりや、こりや。」

と、陽気な三味線に乗って、都々逸^{どづいつさんさ}、三下り^{おおつえ}、大津絵などを、
粋^{いき}な節廻しで歌われると、子供ながらも体内に漠然と潜んで居る
放蕩の血が湧き上って、人生の楽しさ、歓ばしさを暗示されたよ
うな気になります。学校の往き復りには、よく清元の師匠の家の
窓下^{たぐず}にゐ^ゐんで、うっとり^{たぐず}と聞き惚れて居ました。夜机に向つて居
る時でも、新内の流しが聞えると勉強が手に附かず、忽ち本を伏
せて酔つたようになって了います。二十^{はたち}の時、始めて人に誘われ
て藝者を揚げましたが、女達がずらりと眼の前に並んで、平生^{ひごろ}憧
れていたお座附の三味線を引き出すと、彼は杯を手にしなが
ら、感極まつて涙を眼に一杯溜めていました。そう云う風ですから、
藝事の上手なのも無理はありません。

彼を本職の幫間にさせたのは、全く榊原の旦那の思い附きでした。
 「お前もいつまで家にごろ／＼して居ても仕方があるめえ。一つ
 己が世話をしてやるから、幫間になつたらどうだ。只で茶屋酒を
 飲んで其の上祝儀が貰えりやあ、此れ程結構な商売はなかるうぜ。
 お前のような怠け者の掃^はけ場には持つて来いだ。」
 こう云われて、彼も早速其の氣になり、旦那の胆煎^{きもい}りで到頭柳橋
 の太鼓持ちに弟子入りをしました。三^{さん}平^{ぺい}と云う名は、其の時師
 匠から貰つたのです。

「桜井が太鼓持ちになつたつて？ 成程人間に廃^{すた}りはないもんだ
 。」

と、兜町の連中も、噂を聞き伝えて肩を入れてやります。新参と

は云いながら、藝は出来るしお座敷は巧し、何しろ幫間にならぬ前から頓狂者の噂の高い男の事故、またゝく間に売り出してしまいました。

或る時の事でした。榊原の旦那が、待合の二階で五六人の藝者をつかまえ、催眠術の稽古だと云つて、片っ端からかけて見ましたが、一人の雛妓が少しばかりかゝただけで、他の者はどうしてもうまく眠りません。すると其の席に居た三平が急に恐氣おぞけを慄い出し、

「旦那、わッし私やあ催眠術が大嫌いなんだから、もうお止しなさい。何だか人のかけられるのを見てさえ、頭が変になるんです。」

こう云つた様子が、恐ろしがって居るようなものゝ、如何にもか

けて貰いたそうなのです。

「いゝ事を聞いた。そんならお前を一つかけてやろう。そら、もうかゝったぞ。そうら、だんく眠くなつて来たぞ。」

こう云つて、旦那が睨み附けると、

「ああ、真つ平、真つ平。そいつばかりはいけません。」

と、顔色を変えて、逃げ出そうとするのを、旦那が後ろから追いかけて、三平の顔を掌で二三度撫で廻し、

「そら、もう今度こそかゝった。もう駄目だ。逃げたつてどうしたつて助からない。」

そう云つて居るうちに、三平の頸はぐたりとなり、其処へたおれてしまいました。

面白半分にいろ／＼の暗示を与えると、どんな事でもやります。

「悲しいだろう。」と云えば、顔をしかめてさめざめと泣く。

「口惜しかろう。」と云えば、真^まっ赤^かになつて怒り出す。お酒だと云つて、水を飲ませたり、三味線だと云つて、箒を抱かせたり、其の度毎に女達はきやつきやつと笑い転げます。やがて旦那は三平の鼻先でぬツと自分の臀をまくり、

「三平、此の麝^{じや}香^{かう}はいゝ匂いがするだろう。」
こう云つて、素晴らしい音^こを放ちました。

「成る程、これは結構な香^{かう}でげすな。おゝ好い匂いだ、胸がすつとします。」

と、三平はさも気持が好さそうに、小鼻をひく／＼させます。

「さあ、もう好い加減で堪忍してやろう。」

旦那が耳元でぴたツと手を叩くと、彼は眼を丸くして、きよろ／＼とあたりを見廻し、

「到頭かけられちゃった。どうもあんな恐ろしいものはごわせんよ。何か私わッしやあ可笑しな事でもやりましたかね。」

こう云つて、漸く我れに復かえつた様子です。

すると、いたずら好きの梅吉と云う藝者がにじり出して、

「三平さんなら、妾あかしにだってかけられるわ。そら、もうかゝった

！　ほうら、だん／＼眠くなつて来てよ。」

と、座敷中を逃げて歩く三平を追い廻して、襟首へ飛び附くや否や、

「ほら、もう駄目々々。さあ、もうすっかりかゝつちまつた。」
こう云いながら、顔を撫でると、再びぐたりとなつて、あんぐり
口を開いたまゝ、女の肩へだらしなく^{もた}靠れて了います。

今度は梅吉が、観音様だと云つて自分を拝ませたり、大地震だと
云つて恐がらせたり、其の度毎に表情の盛んな三平の顔が、千変
萬化する可笑しさと云つたらありません。

それからと云うものは、榊原の旦那と梅吉に一と睨みされゝば、
直ぐにかけられて、ぐたりと倒れます。ある晩、梅吉がお座敷の
歸りに柳橋の上で擦れちがいざま、

「三平さん、そら！」

と云つて睨みつけると、

「ウム」

と云つたなり、往来のまん中へ仰け反つて了いました。

彼は此れ程までにしても、人に可笑しがられたいのが病なんです。然しなか／＼加減がうまいのと、あまり図々しいのとで、人は狂言にやつて居るのだとは思いませんでした。

誰云うとなく、三平さんは梅ちゃんに惚れて居るのだと云う噂が立ちました。其れでなければあゝ易々やすくと催眠術にかけられる筈はないと云うのです。全くのところ三平は梅吉のようなお転婆な、男を男とも思わぬような勝気な女が好きなのです。始めて催眠術にかけられて、散々な目に会わされた晩から、彼はすっかり梅吉の氣象に惚れ込んで、機おりがあつたらどうかしてと、ちよい

くほのめかして見るのですが、先方ではまるで馬鹿にし切つて、てんで相手にしてくれません。機嫌の好い時を窺つて、二た言三言からかいかけると、直ぐに梅吉は腕白盛りの子供のような眼つきをして、

「そんな事を云うと、又かけて上げるよ。」

と、睨みつけます。睨まれゝば、大事な口説くどきは其方除そつちけにして早速ぐにやりと打ち倒れます。

遂に彼はたまらなくなつて、榊原の旦那に思いのたけを打ち明け、「まことに商売柄にも似合わない、いやはや意気地のない次第ですが、たった一と晩でようがすから、どうか一つ旦那の威光でうんと云わせておくんなさい。」

と、頼みました。

「よし来た、萬事己が呑み込んだから、親船に乗った気で居るが
いゝ。」

と、旦那は又三平を玩具にしてやろうと云う魂胆があるものです
から、直ぐに引き受け、其の日の夕方早速行きつけの待合へ梅吉
を呼んで三平の話をした末に、

「ちつと罪なようだが、今夜お前から彼奴を此処へ呼んで、精々
口先の嬉しがらせを聞かせた上、肝腎の所は催眠術で欺してやる
がいゝ。己は蔭で様子を見て居るから、奴を素裸にさせて勝手な
藝当をやらせて御覧。」

こんな相談を始めました。

「なんぼ何でも、それじゃあんまり可哀相だわ。」

と、流石さすがの梅吉も一応躊躇したものの、後で露見ろけんしたところで、腹を立てるような男ではなし、面白いからやつて見ろ、と云う氣になりました。

さて、夜になると、梅吉の手紙を持って、車夫が三平の処へ迎えに行きました。「今夜はあたし一人だから、是非遊びに来てくれろ。」と云う文面に、三平はぞく／＼喜び、てつきり旦那が口を利いていくらか掴ましたに相違ないと、平生ひごろよりは大いに身じまいを整え、ぞろりとした色男氣取りで待合へ出かけました。

「さあさあ、もつとずツと此方こつちへ。ほんとに三平さん、今夜は妾だけなんだから、ゆつくりくつろいでおくんなさいな。」

と、梅吉は、座蒲団をすゝめるやら、お酌をするやら下にも置かないようにします。三平は少し煙けむに巻かれて、柄がらにもなくおど／＼して居ましたが、だん／＼酔いが循たつて来ると、胆たんが落ち着き、

「だが梅ちゃんのような男勝りの女は、私わッしや大好きサ。」

などゝ、そろ／＼水を向け始めます。旦那を始め二三人の藝者が、中二階の掃き出しから欄間を通して、見て居ようとは、夢にも知りません。梅吉は吹き出したくなるのをじつと堪こらえて、散々出でほう

放だい題のお上手を列べ立てます。

「ねえ、三平さん。そんなに妾に惚れて居るのなら、何か證拠を見せて貰もらいたいわ。」

「證拠と云つて、どうも困りますね。全く胸の中を断ち割つて御

覧に入れたいくらいさ。」

「それじゃ、催眠術にかけて、正直な所を白状させてよ。まあ、妾を安心させる為めだと思つてかゝつて見て下さいよ。」

こんなことを、梅吉は云い出しました。

「いや、もうあればかりは真つ平です。」

と、三平も今夜こそは、そんな事で胡麻化されてはならないと云う決心で、場合によつたら、

「実はあの催眠術も、お前さんに惚れた弱味の狂言ですよ。」
と打ち明けるつもりでしたが、

「そら！ もうかゝつちまつた。そうら。」

と、忽ち梅吉の凜りんとした、涼しい目元で睨められると、又女に馬

鹿にされたいと云う欲望の方が先へ立つて、此の大事の瀬戸際に又々ぐたりとうなだれて了いました。

「梅ちゃんの為めならば、命でも投げ出します。」とか、「梅ちゃんが死ねと云えば、今でも死にます。」とか、尋ねられる儘に、彼はいろ／＼と口走ります。

もう眠つて居るから大丈夫と、隙見をして居た旦那も藝者も座敷へ這入つて来て、ずらりと三平の周囲を取り巻き、梅吉のいたずらを横腹を叩いて、袂を噛んで、見て居ます。

三平は此の様子を見て、吃驚びつくりしましたが、今更止める訳にも行きません。寧ろ彼に取つては、惚れた女にこんな真似をさせられるのが愉快なのですから、どんな恥ずかしい事でも、云い附け通

りにやります。

「此処はお前さんと私と二人限りだから、遠慮しなくてもいゝわ。さあ、羽織をお脱ぎなさい。」

こう云われると、裏地に夜桜の模様のある、黒縮緬の無双羽織をするくと脱ぎます。それから藍色の牡丹くずしの縹珍しゅちんの帯を解かれ、赤大名のお召を脱がされ、背中へ雷神を描いて裾へ赤く稲妻を染め出した白縮緬の長襦袢一つになり、折角めかし込んで来た衣裳を一枚々々剥がされて、到頭裸にされてしまいました。それでも三平には、梅吉の酷い言葉が嬉しくって嬉しくって堪まりません。果ては女の与える暗示のまゝに、云うに忍びないような事をします。

散々弄んだ末に、梅吉は十分三平を睡らせて、皆と一緒^{みんな}に其処を引き上げて了いました。

明くる日の朝、梅吉に呼び醒まされると、三平はふと眼を開いて、枕許に坐っている寝間着姿の女の顔を惚れ／＼と見上げました。三平を欺すように、わざと女の枕や衣類が其の辺に散らばって居ました。

「妾^{あたし}は今起きて顔を洗つて来た所なの。ほんとにお前さんはよく寝て居るのね。だからきつと後生がいゝんだわ。」

と、梅吉は何喰わぬ顔をして居ます。

「梅ちゃんにこんなに可愛がつて貰えりやあ、後生よしに違いありやせん。日頃の念が届いて、私わッしやあ全く嬉しゆうがす。」

こう云つて、三平はピヨコピヨコお時儀をしました、俄かにそわ／＼と起き上つて着物を着換え、

「世間の口がうるそうがすから、今日の所はちつとも早く失礼しやす。何卒末長どうぞくね。へッ、此の色男め！」

と、自分の頭を軽く叩いて、出て行きました。

「三平、此の間の首尾はどうだった。」

と、それから二三日過ぎて、榊原の旦那が尋ねました。

「や、どうもお蔭様で有難うがす。なあにぶつかって見りやあま
るでたわいはありませんや。氣^{きじょう}丈だの、勝氣だのと云ったつて、
女はやっぱり女でげす。からツキシ、だらしも何もあつた話じや
ありません。」

と、恐悦至極の体^{てい}たらくに、

「お前もなか／＼色男だな。」

こう云つて冷やかすと、

「えへ／＼／＼」

と、三平は卑しい Professional な笑い方をして、扇子でぽんと額
を打ちました。

青空文庫情報

底本：「潤一郎ラビリス※」[#ローマ数字Ⅰ、1-13-21]——初期短編集」中公文庫、中央公論社

1998（平成10）年5月18日初版発行

底本の親本：「谷崎潤一郎全集 第一巻」中央公論社

1981（昭和56）年5月25日

初出：「スバル」

1911（明治44）年9月号

※表題は底本では、「幫間《ほうかん》」となっています。

※底本は新字新仮名づかいです。なお旧字の混在は、底本通りで

す。

入力：砂場清隆

校正：門田裕志

2016年3月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

幫間

谷崎潤一郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>